イスラーム世界研究　第3巻2号（2010年3月）372–377頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 3-2 (March 2010), pp.372–377

「コルドバのモスク」――イクバールのウルドゥー詩（3）――

松村 耕光 * 訳

はじめに

本稿は、1935年に出版されたウルドゥー第2詩集『天使ガブリエルの翼（*Bāl-e Jibrīl*）』に収録された、ムハンマド・イクバール（Muḥammad Iqbāl 1877–1938）の有名なウルドゥー詩、「コルドバのモスク（Masjid-e Qurṭubah）」の翻訳（全訳）である。

「コルドバのモスク」は、イクバールが、1932年11月、ロンドンで開かれた第3回イギリス・インド円卓会議に出席した帰途に訪れたスペインのコルドバで作った詩で、コルドバのかつてのモスクを目にした時の感動が、イクバール独特の思想を交えて表現されている[1)]。

この詩の中でイクバールは、優れた芸術作品は、心血が注がれることによって誕生する、という芸術観を表明しているばかりでなく、「恋（ʻishq）」、すなわち神に対する熱烈な信仰の重要性を説くとともに、「恋する」真のムスリムは、神の意志に従って行動し、時代を超える偉業を成し遂げることができる、という思想――イクバール思想においては、「恋」の目的は「愛しい人」、すなわち神との合一ではなく、神の意を体して行動することである――を展開しており、思想詩としても重要な作品である。イクバールは、真のムスリムの特徴をいくつか挙げており、イクバールが思い描いていた理想的なムスリム像を知る上でも重要な作品であると言えよう。

*　大阪大学世界言語研究センター准教授

1）イクバールは、パリを経由して、1933年1月にスペインを訪れた。この時のアンダルシア旅行について、イクバールは書簡の中で次のように記している。

> アンダルシア旅行はこの上なく楽しいものでした。アンダルシアでコルドバのモスクについても詩を書きました。この詩はいずれ出版されるでしょう。アルハンブラ宮殿にはそれほど感銘を受けませんでしたが、モスクを訪れて、私はそれまで覚えたことのないような感情の高ぶりを覚えました。（1933年3月27日付書簡。Shaikh ʻAṭāullāh, ed., *Iqbāl Nāmah*, vol.2, Lahore, 1951, pp.321–322.）

イクバールは、マドリードも訪れており、マドリード大学で、スペインとイスラーム世界における学問の発展について講演を行っている。

コルドバのモスク

繰り返される昼と夜
――それらは様々な出来事を生み出す
　繰り返される昼と夜――それらは生と死の根源
繰り返される昼と夜――その二色の絹糸で
　神はその属性の衣をお縫いになる[2)]
繰り返される昼と夜――それは永遠の楽器が洩らした呻き
　それによって神は可能性の高音低音を示される
繰り返される昼と夜――それらは世界を検査する
　あなたを検査し、私を検査する
あなたが完全ではなく、私が完全ではないなら
　あなたに死が、私に死が宣告されるのである
あなたの昼と夜の本質とは
　昼も夜もない、時の一つの流れである
技芸が生み出す如何なる奇跡もはかない
　この世のものはすべてむなしい
最初のものも最後のものも、隠れているものも現われているものも
　古いものも新しいものも、結局は消えてしまうのである

しかし、真の信徒が完成したものには
　永劫不変の色がある[3)]
真の信徒の行いは恋によって輝きを得る
　恋こそ人生の土台であり、死は恋に手出しできない[4)]
時間の流れは速いが
　恋もまた急流であり、急流を押し止めることができる
恋の暦には今流れている時間の他にも
　名のない、様々な時間が存在する
恋は天使ガブリエルの息であり、選ばれし御方の御心である
　恋は神の御使いであり、神の御言葉である[5)]
恋の陶酔によって土塊（にんげん）は光り輝く

2）「神」原語は dhāt（本質）。
3）「真の信徒」原語は、mard-e khudā。直訳すると「神（khudā）の男（mard）」。信仰によって神の意志を体するようになったムスリムのこと。
4）「恋（‘ishq）」は、神に対する熱烈な信仰を意味する。
5）恋の清浄さが表現されている。「選ばれし御方」は、イスラームの預言者ムハンマドを指す。

　　恋はまじりけのない酒であり、気前のよい人々の杯（さかずき）である[6)]
恋は聖地（カアバ）の法学者であり、軍隊の指揮官である
　　恋は何千もの宿営地を辿る旅人である
恋の撥によって人生の弦から楽の音が生じ
　　恋によって人生に光が生じ、炎が生じるのである

おお、コルドバのモスクよ　おまえは恋によって生まれた
　　恋は不滅であり、消えることはない
色彩や煉瓦、石、竪琴や言葉、音――
　　どの芸術でも心血が注がれることによって奇跡が生み出される
注がれた心血の一滴によって石は心となり
　　声は情熱と陶酔と歌となる[7)]
おまえのたたずまいは心を輝かせ、私の歌は胸を焦がす
　　おまえは心を神に拝謁させ、私は心に解放をもたらす
一握りの土塊（つちくれ）は青い空にまでしか行けないが
　　人間の胸は最高天にもひけをとらない
輝く者は神を礼拝するが
　　懊悩することはない[8)]
インドの異教徒ではあるが――見よ、私の熱情を
　　心にも口にも祈りの言葉がある[9)]
私の調べには情熱がある　私の葦笛には情熱がある
　　私の血管には「アッラー・フー」の歌がある[10)]

おまえが持つ威厳と美しさ――それらは真の信徒の標（しるし）そのものである
　　おまえも真の信徒も堂々としていて美しい
おまえの土台は強固で、おまえの柱は数知れず
　　まるでシリア砂漠のナツメヤシの林のようである
おまえの扉と屋根にはアイマンの谷に現れた神の御光が輝いている
　　おまえの高い尖塔は天使ガブリエル光臨の場である[11)]
ムスリムは決して滅亡しない
　　礼拝時刻を告げ知らせるその声は

6）「薔薇（gul）」と表記しているテキストもあるが、「土塊（gil）」と読む。恋は気前のよい人々の杯であるとは、すべての人に恋する力が与えられているということ。
7）「石は心となり」石に命が吹き込まれるということ。
8）「輝く者」天使のこと。神に恋い焦がれて懊悩するのは、人間だけということ。
9）「インドの異教徒」 謙遜してこう言っている。「祈りの言葉」 原語は ṣalāt-o-durūd。神に、イスラームの預言者ムハンマドやその家族に慈悲を垂れるよう祈る言葉。
10）「アッラー・フー（Allāh hū）」「神こそその者（＝唯一者）」という意味。
11）「アイマン（Aiman）の谷」は、モーセが神の光を見た、シナイの谷。

　　モーセとアブラハムの秘密を明らかにしているから[12)]
ムスリムの土地には限界がなく、ムスリムの地平には際限がない
　　ティグリス、ダニューブ、ナイルの川は
　　ムスリムの大海に生じたさざ波に過ぎない
驚嘆すべきムスリムの時代　感嘆すべきムスリムの物語
　　ムスリムは旧い時代に出発を促した
ムスリムは、味の解る人々に酒を注ぎ、情熱の戦場で馬を駆る
　　その酒はまじりけがなく、その剣は業物である
ムスリムは戦士であり、その鎧は「アッラーの他に神はなし」
　　刃を向けられた時に身を寄せる所は「アッラーの他に神はなし」

おまえによって真のムスリムの秘密が
　　その日々の熱情が、その夜毎の懊悩が明らかとなった[13)]
その気高さ、その思想の素晴らしさが
　　その陶酔、情熱、慎み深さ、誇り高さが明らかとなった
真のムスリムの手は神の御手である
　　圧倒し、成就し、解決し、統御する
土の性質と光の性質を併せ持つ、主（あるじ）の資質を持つ僕（しもべ）
　　その自由な心は二つの世界に捕われることはない[14)]
真のムスリムはわずかな望みしか持たないが、大きな目標を持っている
　　振舞は魅力的で、眼差しは魅惑的である
話すときは優しく、求めるときは激しく
　　戦場でも宴席でも心は清い
真の信徒の信仰は神のコンパスの支点である
　　この世はすべて妄想、幻術、幻影である
真の信徒は理性の到達点であり、恋の果実である
　　真の信徒は世界の宴の熱気である

芸術家のカアバ神殿、輝ける宗教の威厳を示すものよ
　　おまえのおかげでアンダルシア人の土地は聖地のようになった[15)]
おまえの美しさに匹敵するものがこの世にあるとすれば
　　それはムスリムの心の中にしか存在しない
ああ、あの正義の志士たち、あのアラブの騎士たち

12)「モーセとアブラハムの秘密」モーセやアブラハムの教えのこと。
13) 真のムスリム――原詩では bandah-e maumin、すなわち、熱心な信者（maumin）たる神の僕（bandah）と表現されている――は、昼は神のために熱心に活動し、夜は神を恋い慕って涙を流す。
14)「二つの世界」現世と来世。
15)「輝ける宗教」イスラームのこと。

「偉大なる徳性」と真心と信仰を持った者たち[16)]
あの者たちの統治は不可思議な秘密を明らかにした
信仰心ある人々の統治は強権支配ではなく
清貧の精神に基づいているという秘密を
彼らの眼差しは東洋と西洋を教育し
彼らの知性は西欧の闇の中でも道を見続けていた
彼らの血のおかげで今日でもアンダルシアの人々は
陽気で社交的、素朴で美しい
今でもここでは鹿の目を持つ人をどこでも見かけることができる
今でもその眼差しの矢は心を射抜いている[17)]
今尚そのそよ風にはイエメンの香りがあり
今尚その歌にはヒジャーズの音色がある

おまえの土地は星には天空と見えるのに
数世紀もおまえの大気は礼拝時刻を告げる声を聞いていない
苦しい恋を堪え忍ぶ隊商は
どこの谷にいるのか　どこの宿営地にいるのか
ドイツ人は宗教改革の嵐を見た
それは古いものの痕跡をどこにも残さなかった
教会の長老無謬説は誤りとされ
理性の脆弱な小舟が旅立った
フランス人の目も革命を見た
それによって西欧人の世界は一変した
ローマ人の子孫たちは伝統墨守のせいで年老いたが
刷新の歓びを知って若返った[18)]
ムスリムの魂にも今や同じような動きがある
これは神の秘密であり、言葉で語ることは不可能である
見よ、この海の底から何が飛び出すか
蒼穹がどのように色を変えるのか

雲は夕焼けの谷間に沈み
太陽はバダクシャーンのルビーを大量に残して去った[19)]
村娘の歌は素朴で胸を打つ
心の舟にとって青春は奔流である

16）「正義の志士たち（mardān-e ḥaqq）」は、「神の志士たち」とも訳せる。「偉大なる徳性（khulq-e ʻazīm）」コーラン68章4節にちなむ。
17）「鹿の目」大きくて、美しい目を意味する定型表現。
18）ムッソリーニによる改革運動を指していると考えられる。
19）バダクシャーンはルビーの産地として有名。

グアダルキビル川よ、おまえの岸辺で何者かが
　　他の時代の夢を見ている[20)]
新しい世界は未だに運命の帳の中にあるが
　　私にはその夜明けが見える
思想の面から覆いをとれば
　　西欧は私の歌に堪えられないであろう
変革のない生は死である
　　変革の格闘こそ諸民族の魂に命を与えるのである
常に自分の行動を吟味する者たちは
　　運命の手に握られた剣のようなものである
心血を注がなければ、いかなるものも未完成である
　　心血を注がなければ、歌は愚かな妄想である

20）グアダルキビル（Guadalquivir）川は、コルドバのかつてのモスクの側を流れている。